

水理学研究の展望

水理委員会委員長

1. 研究現況の編集経過

昭和38年度水理学研究の現況も前年度の編集方針にしたがい、この資料を作成したが、これは第3集である。なお、今回の研究題目資料に関する調査依頼先は、全国の各大学・研究機関67であるが、回答に接したものはうち51であり、今回は未回答の機関および新しく回答を寄せられたものも相当数ふくまれている。研究題目の分類は一応土木学会文献調査委員会作成の文献分類項目表にしたがっているが、新しい研究課題のなかにはこの分類表に表わされないものもあり、ここに資料提供機関の各位にお詫び申し上げるとともに、今後の問題として残したいと考えている。

2. 水理学研究の動向

ここ数年来より、(1)乱流、摩擦抵抗などの流れの運動機構に関する基礎的研究、(2)せき、余水吐、取水設備、サージタンクなどの水理構造物に関する応用研究、(3)高潮、津波、海岸の波などに関する研究、(4)掃流、洗掘、漂砂などの土砂の流動に関する研究、(5)流出解析を主とする水文学的研究および(6)汚水処理、環境汚染などの基礎研究が、計測技術の進歩および高速電子計算機の積極的利用にささえられ、さかに行なわれているが、その内容を詳細に検討すれば、近代流体力学および応用数学の知識を用いる傾向などがあらわれ、着実かつ徐々に変ぼうをとげているように思われる。

3. 国内における研究活動

すでに例会となっている水理講演会(第8回)が38年10月に大阪で開催され、(1)コンピューターの水理学への応用、(2)実験計測技術の最近の開発、(3)洪水(これに関連する土砂流送、河川計画をふくむ)について多

くの発表とさかんな討議が行なわれ、39年2月には東京で本委員会後援のもとで河川災害に関するパネルディスカッションが開催され、関係者各位による、(1)河川災害とは何か、(2)河川防災基準、(3)災害予知、および(4)資料整理について2日間にわたり、熱心な討議が行なわれた。また、「水理公式集」の改訂は同改訂委員会(委員長横田周平氏)の献身的努力により行なわれ、38年8月に東京で講習会が、また39年3月大阪において例題による説明会が行なわれた。

なお、次回より水理講演会と河川災害に関するパネルディスカッションは期日を相前後して行なわれるように決定され、39年度の会合として、40年2月に東京において開催される予定である。この第9回水理講演会の課題としては、(a)開水路の不定流、(b)水理構造物に関する流れの問題、(c)その他(自由)が決定しており、またセミナーの課題として、(a)地下水流、(b)密度流(c)河川災害予知、(d)洪水流の局所挙動が予定されている。さらに新しい試みの一つとして同委員会においては水工学研修会を催し、最近における高度の木工技術を約2週間にわたり研修する会合を開く予定にしている。

4. 水理学関係の国際会議

昭和38年度の国際会議として、5月に国際かんがい・排水委員会第5回会議が東京で、8月には米国パークレーで国際地球物理連合総会が行なわれ、とくに、9月には第10回国際水理学会会議が英国ロンドンで開催され、日本からも水理委員としての石原藤次郎、林泰造、本間仁氏を初め多数の方々が出席され、本間教授は同学会副会長として選出された。

なお、近く開催される国際的な催しとしては39年6月にリスボンで海岸工学国際会議が、6~8月には米国フォート・コリンズでの流体力学夏期大学、また40年9月にはレニングラードにおいて第11回国際水理学会会議などが予定され、当委員会においても関係各委員会と緊密な連絡を保ち、国際協力をさかんにするとともにわが国における水理学研究の現状を広く海外に知らせるようになりたいと考えている。

水理委員会委員名簿

委員長	石原藤次郎	副委員長	横田周平			
委員	足立昭平*	芦田和男*	井口昌平	井田至春	石原安雄*	
	岩垣雄一*	岩佐義朗*	岩崎敏夫	上田年比古*	尾崎晃	
	春日屋仲昌*	岸力*	川秀夫	久宝雅史	古賀雷四郎	
	左合正雄	佐藤清一	坂本竜雄	沢田周次	篠原謹爾	
	篠原登美雄	嶋祐之*	杉尾捨三郎	千秋信一*	田中茂	
	高橋裕*	嶋内俊雄	椿東一郎	中山治*	永井莊七郎	
	西畑勇夫	浜田徳一	速水頌一郎	林謙造	藤芳義男	
	細井正延*	堀口孝男*	本間仁	三浦晃*	三村誠三	
	室田明*	矢野勝正	山岡勲	米元卓介	(*印は幹事兼任)	